

#### 4. 再会

### 木下ソーイングと取引を開始

川原敏子氏がタオル縫製を始めて25年ほど経ったある日、木下正男氏が川原氏の自宅にタオルの配送にやってきた。川原氏がタオル縫製を始めたおり、最初にやりとりしたのが木下氏だった。当時、タオルメーカーの中忠（株）で宅配の業務を任されていた木下氏は、中忠のタオル縫製を担っていた女性たちと週に何度か顔を合わせていた。そのなかのひとりが川原氏であった。

十数年のブランクののち、木下氏が1987年に木下急配を創業し、タオルの配送もおこなうようになったため、ふたたび川原氏と仕事での付き合いが始まった。川原氏が重い病気から復帰して最初の仕事が、「少しずつでええから縫ってくれるか」と言って木下氏が運んできたタオルのヘム縫いだった。これも何かの縁である。



（有）木下ソーイング本社

そして、木下氏が1994年に（有）木下ソーイングを設立し、いよいよ専属の縫製技術者を確保しなければならなくなり、顔なじみで腕の良い川原氏にまずは声をかけた。川原氏の縫製の腕前を知っていた木下氏は、何度も川原氏の自宅に通い、結果的に川原氏を口説き落とすことができた。最初は、「他のところのものを縫いよるから、できんのよね」と川原氏が言うと、「それは奥に隠しておいて、はよこれ縫わんかね」と木下氏が応える。文字面を追うと木下氏の「脅し」のように聞こえるが、冗談を交えていつもニコニコしてやって来る木下氏に、川原氏は最終的には折れて木下ソーイングのために縫製を請け負うことにした。

元々、縫製技術の高い川原氏は、木下ソーイングの仕事のなかで

もスキルを要する縫製の依頼が舞い込んだ。他の縫製技術者だったら、直しが何度も入るようなボーダー柄のヘム縫いなどがそうである。こうして、川原氏と木下氏のタッグがふたたび組みまれ、現在もなおつづいている。



（参考）ボーダー柄のヘム縫い

## 5. 現在

### 歴代3台目の工業用ミシンで毎日縫うことが喜び

縫製とは、一般的には縫い合わせて衣服などをつくることを言うが、タオル縫製の場合、ハンドタオルやフェイスタオル、バスタオルなど商品サイズに合わせてカットされたタオル生地（耳巻き）および底辺（ヘム縫い）を、工業用ミシンを使って縫う作業のことを言う。ヘム縫いする際に、ブランド名や品質保証、メーカー情報などのタグと一緒に縫い合わせる。一般的な縫製の場合、素材やデザイン、ステッチのパターンなどによってさまざまな技術を必要とするが、タオルの場合では、ほとんどの素材がコットン100%であるため、素材の違いよりもデザインや柄によって複雑な技術を要求されるときがある。そして重要なのは、スピードである。どん

なに複雑な縫製でも時間をかければある程度の仕上げはできるが、技術者の腕前を左右するのはやはりスピード感である。



耳巻き（タテ）とヘム縫い（ヨコ）



今治タオルの商標と品質保証のタグを縫製したもの

たとえば、先にも触れたが、「ボーダーヘム」という縫製は、ヘムの部分のみに特別のデザインが施されている場合、デザインに合わせて生地を折り込み、ヘム縫いする。デザインを損なうと検品の際に不合格となるので、スピード感のある確かな技術を持っていないと使い物にならない。

川原氏は、縫製の仕事を始めた頃、家庭用ミシンと工業用ミシンの使い方の違いに狼狽したが、それでも3日ほどで使い方を修得し、1週間もすれば完全に使いこなしていた。縫製の仕事を始める以前は、足踏み式のゆっくりしか動かない家庭用ミシンには慣れていたが、電動式の高速で動く工業用ミシンは見るのも始めて、使うのも始めてだったので、「うっかり手を縫ってしまわないように気を付けて」とよく言われたものである。現在は歴代3台目の三菱製の工業用ミシンを使って、単純な縫い合わせから複雑な縫い合わせまで、大判のバスタオルから小型のハンカチまで注文に合わせて何でも縫う。ミシンは、川原氏にとって毎日一緒に仕事をする相棒であり、

歴代のどのミシンにも愛着があり、いつも感謝しながら縫っている。



現在使用している3代目三菱製工業用ミシン



作業場に積まれた縫製済みタオル

思い起こせば、およそ60年まえに中忠に電話をして縫製の仕事を始めたが、このときの思い立ちが「生涯現役」の仕事に繋がっている。

## いまでも継続できるのは「信頼関係」があるから

取引先の（有）木下ソーイング代表を務める2代目の木下誠氏は、川原氏のことを「母ちゃん」と呼び、絶大な信頼を置いている。川原氏の強い責任感と腕前を買ったのである。若い頃に比べると縫製のスピードは落ちているが、それでも縫製の腕は昔と変わらない。丁寧で速い。

川原氏にこれだけ長い間縫製の仕事をつづけてこられた理由を尋ねると、「自分の家でやってきたことやし、それをつづけてきただけやしね。別に特別なことは何もないね」という答えが返ってきた。木下ソーイングと取引するようになってからは、「母ちゃん、母ちゃ



んって、みんなに大事にしてもらえるんよね。それが何より嬉しいのよね。長続きの秘訣はこれかな」と川原氏は言う。

誠氏は、父親の業務を引き継いで川原氏の自宅を行ったり来たりしているが、実は幼少の頃も正男氏に連れられて行ったり来たりしていた。誠氏はさすがにそのときのことをよく覚えていないが、学校が休みに入るたびに正男氏が子どもたちをトラックに乗せて川原氏の自宅にやって来た。川原氏が「あれ、休みになったから父ちゃんと来たの？」と素朴な会話ながら何度も顔を合わせるうちに家族ぐるみの付き合いとなり、木下家の子どもたちはいつの日か川原氏のことを「母ちゃん」と親しみを込めて呼ぶようになった。

通称、「母ちゃん」の川原氏は、年を重ねるたびに仕事のスピードが遅くなり、急ぎの仕事に十分に対応できないことを申し訳なくおもっている。「年とともに徐々に手の動きがとろなってきて（遅くなってきて）、いつ辞めてくれって言われるかなっておもいながら、いまはさせてもらいよりも」と川原氏は苦笑する。若いときの3分の1くらいにまでスピードが落ちたそうであるが、その代わり少しでも縫製に時間が割けるように努めている。たとえば、家事が一段落する夕食後に1時間でも1時間半でも早く作業場に向かえるように、夫に協力してもらって早めの夕食をとっている。とくに急を要する依頼が入ったときは頭から離れないので、そうしないと落ち着かない。

自宅の離れにある川原氏の作業場には、仕事道具の工業用ミシン一台が据え付けられており、縫製前のタオルと縫製後のタオルが嵩高く積み、そして細かな事務用文房具やメモなどが置いてある。置いてあるというよりも吊るしてある。メモの置き場所がかな




作業場に吊るしてあるメモ類

りユニークであり、スペースにあまり余裕がないことも理由であるが、一目見てすぐにわかるように吊るしてある。納品の期日を間違わないように、川原氏の長年のキャリアからくるちょっとした工夫である。

縫製のスピードは落ちているとはいえ、「丁寧で速い」川原氏の縫製技術は健在であり、強い責任感によって木下ソーイングとの信頼関係は強固である。

## 近くに住んでいる子どもたちのおかげで、毎日安心して暮らせる

長女の直美氏は、川原氏の自宅の隣りに住んでおり、時間があつたら川原氏の様子を見に来てくれる。「もう年やからね」と言う川原氏は、長女が顔を出してくれるたびに安心感を覚える。長男の功氏は、現在（株）ハラプレックス  に勤めており、タオルの梱包など資材調達を担当している。やはりタオルに縁がある。

今治に住んでいると、どこかでタオルの話を書く。どこかでタオルに関係して働いている人に出会う。今治は、そういう「タオルの町」なのである。（次号につづく）

